

## 文学教材の研究―「俳句」の言語表現―

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻  
北九州市八幡西区自由ヶ丘一・二（〒八〇七―八五八六）  
（二〇一六年六月二日受付、二〇一六年七月二十八日受理）

### はじめに

俳句とは、五・七・五の十七音から成る世界最短の定型詩である。室町時代に流行した連歌の遊戯性、庶民性を高めた文芸が俳諧であり、江戸前期に松尾芭蕉が出てその芸術性を高め蕉風を創始した。単独でも鑑賞に堪える自立性の高い発句を数多く詠んだことが俳句の源流となった。近代になって、個人の創作性を重視した俳句を成立させたのが、明治時代の正岡子規であった。子規は江戸末期の俳諧を月並俳諧と批判して、近代文芸にするための俳句革新運動を行い、「ホトトギス」に拠って日本派と称して、写生俳句を唱えた。子規の死後、日本派は高浜虚子と河東碧梧桐の二派に分かれた。虚子は「ホトトギス」を主宰し、伝統的な季題や定型を守る立場をとり、碧梧桐は写生主義をさらに徹底させ、自然観照における個性的な実感を重んじる立場をとった。荻原井泉水は季題無用論を唱え、非定型の自由律俳句を主張し新傾向派と呼ばれ、「層雲」を主宰した。放浪の俳人尾崎放哉や種田山頭火は井泉水の門である。ホトトギス派の保守的な作風に対して、水

原秋桜子は主観的叙情を重んじる立場から、新たに「馬酔木」を主宰した。山口誓子も新時代感覚による主知的構成を唱えて、これに同調した。こうした新興俳句運動に呼応して、吉岡禅寺洞の無季俳句や、日野草城のモダニズム俳句などの俳句革新の動きが起こった。さらに、新興俳句の主張は素材論にすぎないとし、俳句は「我はいかに生きるか」という意識を深めるべきものとする人間探求派が起こった。中村草田男、加藤楸邨、石田波郷らである。現在では、俳句甲子園の影響もあり、若い世代の俳句人口が増加している。本論では文学教材としての俳句について論考する。

### 一、中学校の「俳句」教材

中学校国語教科書は、2016年2月発行で、教科書改訂を実施した。中学校3年で5社ともに「俳句」を教材として採録している。光村図書『国語3』『俳句』の単元では、宇多喜代子氏による「俳句の可能性」が掲載され、「俳句には、一句の柱となる言葉に『季語』を用い、それを五・七・五という『定型』で表現す

るという基本的な約束がある。この約束を『有季定型』といい、俳句という韻文を支える大きな力となっている。(中略)『定型』という制約の中では全部言い尽くせない。そこを補うために工夫された方法の一つに『切れ字』がある。(中略) 自由な音律の俳句を『自由律俳句』と呼び、季語のない俳句を『無季俳句』とよんでいる<sup>2</sup>。という俳句の基礎的な説明がある。ここで、宇多喜代子氏は、五人の俳人による五句を採録し、具体的な解説を行っている。

どの子にも涼しく風の吹く日かな 飯田竜太

いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡子規

跳箱とびこの突き手一瞬冬が来る 友岡子郷

たんぽぽのぽぽと綿毛わたげのたちにつけり 加藤楸邨

分け入つても分け入つても青い山 種田山頭火

俳人である宇多喜代子氏は教科書のために本文を書きおろし「約束が多くて、俳句は難しいと思われるかもしれないが、ここに取り上げた俳句には特別なものは一つもでてこない」<sup>3</sup>と断つたうえで、生徒に自由に俳句を作ってほしいと訴える。「俳句を味わう」では「それぞれの俳句に表現されている季節や情景、作者の思いなどを捉え、朗読してみよう」として、九人の俳人の九句を掲載している(「季語、〳〵切れ字、〴〵体言止め」)。学習目標

に「筆者のものの見方や感じ方、表現のしかたなどを読み味わい、俳句の世界に親しむ」とあるように「詠まれている情景を想像しながら、それぞれの俳句を音読」するのが肝要である。

赤い椿つばき白い椿と落ちにけり 河東碧梧桐(春)

バスを待ち大路の春をうたがはず 石田波郷(春)

萬緑ばんりよくの中や吾子あこの齒生え初そむる 中村草田男(夏)

飛び込みのもう真つ白な泡の中 神野紗希(夏)

桐一葉きりひとば日当りながら落ちにけり 高浜虚子(秋)

金剛こんごうの露ひとつぶや石の上 川端茅舎(秋)

冬菊のまとふはおのがひかりのみ 水原秋櫻子(冬)

日と月のごとく二輪ふたりんの寒牡丹 鷹羽狩行(冬)

咳せきをしても一人 尾崎放哉(無季)

音読することで、句切れを意識させ、体言止めによる余韻や擬態語の響きを感じさせ、読みを深め、俳句に対する興味・関心をもたせることが重要である。

三省堂『現代の国語3』『俳句』の单元では、編集委員会によ

る書きおろし「俳句の世界」があり、「五・七・五の三句十七音のことばで表現される定型の詩を俳句といいます。（中略）一句の中に、季節を表すことば、すなわち『季語（季題ともいう）』を用いるという独特の約束があります。また、『や』『かな』『けり』のような『切れ字』と呼ばれることばによつて、句の印象を深める方法がとられる」と説明があり、「俳句はことばが少ないだけに、一つ一つのことばのイメージを豊かに受け止める必要があります。また、ことばとことばの出会いから新しいイメージが生まれるところも、俳句の魅力です」という解説がある<sup>4</sup>。

桐一葉日当りながら落ちにけり 高浜虚子

まさをなる空よりしだれぎくらかな 富安風生

菫ほどな小さき人に生れたし 夏目漱石

一軒家も過ぎ落葉する風のままに行く 河東碧梧桐

さらに、俳句は今や日本独自の文学にとどまらず、「HAIKU」として世界の人々に親しまれていることや、俳句は国際的な文学として外国語に翻訳されたり、また、外国語で創作されたりすることを紹介している。「俳句十句」では、十人の俳人の十句を掲載している（―季語、〓切れ字）。

バスを待ち大路の春をうたがはず 石田波郷（春）

菜の花がしあはせさうに黄色して 細見綾子（春）

何もかも散らかして発つ夏の旅 大高翔（夏）

万緑の中や吾子の齒生え初むる 中村草田男（夏）

芋の露連山影を正しうす 飯田蛇笏（秋）

星空へ店より林檎あふれをり 橋本多佳子（秋）

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや 中村汀女（冬）

いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡子規（冬）

分け入つても分け入つても青い山 種田山頭火（無季）

入れものが無い両手で受ける 尾崎放哉（無季）

「学びの道しるべ」にあるように、好きな俳句を選んで、表現の工夫や効果について考え、俳句の魅力を体得することが重要である。

教育出版『伝え合う言葉 中学国語3』『近代の俳句』では、春・夏・秋・冬の句が各三句ずつ掲載されている（―季語、〓切れ字）。

春の句

春風や闘志いだきて丘にたつ 高浜虚子

赤い椿<sup>つばき</sup>白い椿と落ちにけり 河東碧梧桐  
ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな 村上鬼城

## 夏の句

ひつぱれる糸まつすぐや甲虫<sup>かぶとむし</sup> 高野素十  
万緑の中や吾子<sup>あこ</sup>の齒生え初むる 中村草田男  
噴水のしぶけり四方<sup>よも</sup>に風の街 石田波郷

## 秋の句

啄木鳥<sup>きつづき</sup>や落葉<sup>おちば</sup>をいそぐ牧の木々 水原秋櫻子  
をりとりてはらりとおもきすすぎかな 飯田蛇笏  
燕<sup>つばめ</sup>はやかへりて山河音もなし 加藤楸邨

## 冬の句

いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡子規  
風雪<sup>ふうせき</sup>にたわむアンテナの声を聴く 山口誓子  
咳<sup>せき</sup>の子のなぞなぞあそびきりもなや 中村汀女  
夕立やお地蔵さんもわたしもずぶぬれ 種田山頭火(無季)  
こんなよい月を一人で見て寝る 尾崎放哉(無季)

「俳句とは」では、「句切れと切れ字」の説明があり、季語を季

節によつて分類整理した書物「歳時記」について紹介している。  
学校図書『中学校国語3』「俳句十五句」では、「風景」「花」「生  
き物」「愛」「命」の五項目について二句から四句を掲載している  
(「季語、〓切れ字」)。

## 風景

春風<sup>はるふう</sup>や闘志<sup>とうし</sup>いだきて丘に立つ 高浜虚子(春)  
滝落ちて群青<sup>ぐんせい</sup>世界とどろけり 水原秋桜子(夏)  
分け入つても分け入つても青い山 種田山頭火(無季)

## 花

つきぬけて天上の紺曼珠沙華<sup>こんまんじゆしゃげ</sup> 山口誓子(秋)  
芋の露連山影を正しうす 飯田蛇笏(秋)  
この樹<sup>き</sup>登らば鬼女<sup>きよめ</sup>となるべし夕紅葉<sup>ゆふ</sup> 三橋鷹女(秋)

## 生き物

鮫鰐<sup>あじう</sup>の骨まで凍ててぶちきらる 加藤楸邨(冬)  
冬蜂<sup>ふゆはち</sup>の死にどころなく歩きけり 村上鬼城(冬)  
木の揺れが魚に移れり半夏生<sup>はんげしやう</sup> 大木あま(夏)

## 愛

万緑<sup>ばんりよく</sup>の中や吾子<sup>あこ</sup>の齒生え初むる 中村草田男(夏)

子の髪の風に流るる五月来ぬ 大野林火(夏)

きみ嫁けり遠き一つの計に似たり 高柳重信(無季)

逢ひに行く開襟の背に風溜めて 草間時彦(夏)

命

捕虜冷えぬ五体の火種皆絶えて 鈴木ゆすら(無季)

戦没の友のみ若し霜柱 三橋敏雄(冬)

学習目標として、「句表現に込められた思いや情景を捉える」「俳句特有の表現を捉える」ことが掲げられている。

東京書籍『新編 新しい国語3』では、片山由美子氏の書きおろし「俳句の読み方、味わい方」を掲載している。

たんぽぽや日はいつまでも大空に 中村汀女

囀をこぼさじと抱く大樹かな 星野立子

をりとりてはらりとおもきすすきかな 飯田蛇笏

五・七・五は、それぞれを「上五」「中七」「下五」と呼ぶこと、形および意味のうえで切れ目となっているところを「切れ」があるということを解説したうえで、「まず、声に出して読み、リズムを感じて」「季語の持つ味わいがどう生かされているかを確認」することを薦めている<sup>5)</sup>。「俳句五句」では五人の俳人の五句を

掲載している(―季語、〳切れ字)。

春風や闘志いだきて丘に立つ 高浜虚子(春)

万緑の中や吾子の歯生え初むる 中村草田男(夏)

赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり 正岡子規(秋)

冬菊のまとふはおのがひかりのみ 水原秋桜子(冬)

分け入つても分け入つても青い山 種田山頭火(無季)

単元の目標である「表現の工夫に着目して、俳句を読み味わう」は、鑑賞文を参考にすることで学習しやすくなっている。中学校国語教科書5社では、取り上げる俳人と俳句の数や配列の仕方に違いはあるが、重複して各社で取り上げられている俳人と俳句が多い。有季定型俳句では高浜虚子と中村草田男、無季自由律俳句では種田山頭火が複数の教科書で掲載されている。5社掲載は「万緑の中や吾子の歯生え初むる」(中村草田男)、4社掲載は「分け入つても分け入つても青い山」(種田山頭火)、3社掲載は「いくたびも雪の深さを尋ねけり」(正岡子規)と「春風や闘志いだきて丘に立つ」(高浜虚子)である。

## 二、高等学校の「俳句」教材

高等学校国語教科書改訂新刊のなかで、筑摩書房『精選国語総合 現代文編 改訂版』『国語総合 改訂版』では、「俳句」教材

を取り上げている。「俳句」の指導については、俳句の特徴や俳句の約束をおさえて、「感動の中心は何か」「なぜこの言葉が選ばれたのか」を考える授業が重要である。二冊の教科書に掲載された俳句について考察する（―季語、〓切れ字）。

## 秋三句

この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉 三橋鷹女

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 正岡子規

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々 水原秋桜子

## 冬三句

いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡子規

海に出て木枯帰るところなし 山口誓子

冬深し柱の中の濤の音 長谷川權

## 春三句

バスを待ち大路の春をうたがはず 石田波郷

春風や鬨志いだきて丘に立つ 高浜虚子

春ひとり槍投げて槍に歩み寄る 能村登四郎

## 夏三句

白牡丹といふといへども紅ほのか 高浜虚子

万緑の中や吾子の齒生え初むる 中村草田男

子を殴りしながき一瞬天の蟬 秋元不死男

中学校で学習した三橋鷹女・正岡子規・水原秋桜子・石田波郷・高浜虚子・中村草田男の俳句が、高等学校でも採録されている。中学校では、季語・切れ字といった俳句の約束に注意して鑑賞したが、高等学校で文学教材として扱う場合は、感動の中心は何かについて考え、感動は一つであることから、選ばれたことばの意味について考察する必要がある。

貞光威氏は1986年、1996年に高等学校国語教科書で、近・現代俳句の教材がどのように扱われているかを調べ、1996年には高等学校国語教科書「国語Ⅰ」および「国語Ⅱ」において、各出版社から発行されているすべての教科書一三の出版社二六種を対象に調査した。その結果、俳句が掲載された回数の最も多いのは、高浜虚子で六五回、山口誓子（五八回）、中村草田男（五七回）、加藤楸邨（五五回）と続くと指摘したうえで、俳句の仮名遣いについて出版社による違いについて「俳句が古典の教材としてではなく、現代文の教材としてとらえられていることを考慮して、振りがなだけでも、早く現代仮名づかいに改めることを提案」<sup>6</sup>している。しかし、現代文の教材だからといって、音韻の響きを大切にすると韻文の場合は、ふりがなを含め、原文は歴史的仮名遣いで表記するのが適切であると考えている。



### 三、女性俳人の「俳句」

明治書院『新 精選国語総合』（2008年1月）では、高浜虚子、飯田蛇笏、水原秋桜子、山口誓子、中村草田男、加藤楸邨、尾崎放哉、杉田久女の俳句が採録され、筑摩書房『現代文 新訂版』（2013年1月）「俳句」には、正岡子規、尾崎放哉、杉田久女、水原秋桜子、中村草田男、石田破郷、高柳重信の俳句が採録されている。このように、高等学校教科書で女性俳人として杉田久女と中村汀女が取り上げられることが多い<sup>7)</sup>。

台所雑詠でデビューした杉田久女（1890年～1946年）は、高浜虚子の女性俳人養成の先駆けとなる。昭和5年には、大阪毎日新聞社、東京日日新聞社主催の「日本新名勝俳句」で帝国風景院賞に輝く。昭和7年3月には主宰誌「花衣」を創刊し、五号（同年9月）まで発行する。昭和8年には、「ホトトギス」同人に推挙され、昭和7年7月、8年7月、9年5月には、「ホトトギス」巻頭を飾っている。坂本宮尾氏は「杉田久女は天才型の俳人であった。彼女には鋭い直感と感受性、並外れた集中力、さらに思いを的確に表現する言語能力という天賦の才が備わっていた。それと同時に、向学心に富んだ猛烈な努力家でもあった。日本の古典、とくに『万葉集』と『源氏物語』、また聖書をはじめとする西洋文学にも造詣が深かった。彼女は心ならずも小倉という地方都市で長年暮らすことになったが、古典にゆかりのある筑紫の風景は、その詩心を刺激し続けた。中央俳壇から離れたこの

地にあつて、古今の俳書を渉獵して貪欲に学び、自身で句境を開拓していった<sup>8)</sup>と述べている。天才であるとともに、努力家でもあったのである。

近代俳句の一つの傾向は、人生の断片を小説戯曲化していることである。鈴木厚子氏は「現代に入つて久女の作品が注目されたのは、昭和三十八年からの高校の教科書に初めて近代の女性俳人の作品が載り、それが久女の作品だったからであろう<sup>9)</sup>。と指摘する。国語科文学教材として、杉田久女の「俳句」を取りあげることは、豊かな言語表現を身につけるうえで有効であると考ええる。

中村汀女（1900年～1988年）は、熊本県生まれで、現代女性俳人の草分けである。日常吟で知られ、水上勉が「日常心の所産は、広い普遍となつて心を打つのである。誰もが、ああ、とうなずかざるを得ない情景である<sup>10)</sup>」と指摘するように、おそらくは感性で情愛の一瞬を俳句に取り込む名人である。句集に『汀女句集』『花影』等がある。

### 四、有季定型俳句と自由律俳句

有季定型俳句には、文人俳句といわれるものがある。文豪と呼ばれ、散文で活躍した夏目漱石と芥川龍之介、物理学者であり随筆家としても著名な寺田虎彦の作品について考察する。

## ・夏目漱石

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

菫程な小さき人に生れたし

仏性は白き桔梗にこそあらめ

漱石の俳句は有季定型俳句で、漢詩とともに評価が高い。漱石の恋した女性の一人とうわさされる楠緒子（大塚保治夫人）が早世したとき、菊（季語・秋）の句を詠んだ。菫（季語・春）は、漱石の理想の姿であり、白い桔梗（季語・秋）には仏性を観ている。

## ・芥川龍之介

蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな

青蛙おのれもペンキぬりたてか

稲妻や何ぞ北斗の静なる

芥川の俳句は、斬新でユニークな視点が特徴である。ゼンマイ（季語・春）に蝶の舌を重ねて観ているのが楽しい。青蛙（季語・夏）のぬるぬるした表皮をペンキぬりたてに見ているのがユニークである。稲妻（季語・秋）の瞬時的な動きの速さをとらえて絶妙なシャッターが押されている。

## ・寺田寅彦

人間の海鼠となりて冬籠る

哲学も科学も寒き噓哉

客観のコーヒー主観の新酒哉

寅彦の俳句は、物理学者という表の顔とは違った、しなやかな感性がほとばしる主観的な表現に味がある。海鼠（季語・冬）は柔軟な外皮中に微細な骨片をもつという深海の生物で、自分を海鼠に例えているところが自虐的で面白い。噓（くさめ）（季語・冬）でアカデミズムを吹き飛ばしている。コーヒーが客観で、新酒（季語・冬）が主観というのは、まさに主観であつて、寅彦流というところが斬新である。

無季自由律俳句には、2015年上半期の芥川龍之介賞を受賞した作家である又吉直樹の作品がある。お笑い芸人というプロフィールを持ち、言葉に対する現代感覚がすぐれ、現代若者に絶大な人気を誇っている。

## ・又吉直樹

カキフライが

無いなら

来なかった

転んだ彼女を



見て少し嫌いになる

よく解らないが

取り敢えず笑っている

状態

又吉直樹の俳句は、若者の感性を的確にとらえ、お笑いのねたのような軽妙な洒落が効いている。無季自由律俳句であり、会話のようなストレートな表現なので、語彙数が極端に少ないという現代の若者言葉に、豊かな言葉をはぐくむ契機となる作品である<sup>1)</sup>と考える。

## 五、句会について

2016年度発行の中学校国語教科書5社で、「俳句」の創作にふれているものは学校図書、教育出版、三省堂の3社である。学校図書では「学びの窓」で「各自俳句を作って持ち寄り、批評し合おう」とある。教育出版では「みちしるべ」のあとに「句会をやってみよう（協同で作る・協同で読む）」とあり、句会についての説明がある<sup>2)</sup>。

### 句会の手順

①出題 俳句を作る手がかりの言葉を決める。全員が使う「季語」から選んでも、大まかに「春」などのテーマで選んでも

よい。

②投句 できた作品は、作者名を伏せて提出する。

③清書 作品をプリントなどで一覧できるようにする。

④選句 全ての作品を音読し、よいと思う句を各自で数句選ぶ（ただし、自分の句は選ばないこと）。

⑤披講 各自の選句結果を発表し、集計する。

⑥合評 上位に選ばれた句をみんなで批評する。

三省堂では「学びの道しるべ」のあとに、「表現プラザ」「句会をひらこう」で「句会は、俳句の発表会と勉強会を兼ね備えた集まりです。江戸時代後半に始まった句会は、現代に引き継がれ、今も日本各地でひらかれています。互いに批評し合って点を入れ、優秀作品を選ぶなどのコンテスト形式も楽しまれています」と説明し、句会について具体的に詳しく紹介している<sup>3)</sup>。

### 句会の進め方

①一人二句ずつ俳句を作り、短冊などに書いて提出する。【出句】  
②作者がわからないように全員の句を並べた紙を、全員に配る。  
③優れている、いいなと思う句を、一人が五句選んで一票（一点）ずつ投票する。【選句】＊自分の句には投票できません。  
④最も多くの票（点）を集めた俳句を決定、発表する。＊票（点数）の多い順に、「特選」「秀逸」「佳作」、「天」「地」「人」などとランクをつけて発表することもあります。

⑤票（点）が入った句について、それを選んだ人が「なぜその

句に投票したのか」を述べ合う。

⑥票(点)が入った句の作者を、得票数(得点数)の少ない順に明らかにしていく。【名乗り】作者は作った意図や受けた評価についての感想を述べる。

⑦票(点)が入らなかった句も含めて、「いいなと思ったところ」「もつと知りたいこと」「この句はこういう思いで作った」など、作品をめぐって話し合う。

俳句の言語表現を指導する場合、形式や方法にとらわれ過ぎる傾向があるが、言語表現の楽しさを味わう教材として、授業で取りあげる工夫が大切である。俳句をより深く体得するのに、句会の実施は有効であると考え。アクティブラーニングの実践として、積極的に国語科で取り入れたい授業方法である。

## おわりに

湯本明子氏は「句碑は俳人にとって句集を伝える記念碑でもあり、また栄光を讃え知らしめる尺度ともなる。刻まれた十七文字の中に、その俳人の魂が宿っている」<sup>1)</sup>と述べている。俳句の詠まれた場所に、句碑が建てられることがある。

句碑に向かい、鎮魂の祈りをこめて刻まれた句を誦ずることで、わたし達は自らの魂を浄化することができる。石に刻まれた俳句は時間の経過に侵食されることがなく、俳人の切り取った一瞬のことばを後世の人々に遺すことができる。句碑は、ことばの力が発

揮された証であり、現代人が先人の抱いた感覚に想いを馳せる現場である。句碑を訪れることで、刻まれたことばが胸に甦るのである。

文学教材としての「俳句」は、生徒にことばの力を認識させるための有効な言語表現であると考え。

\* 中学校国語教科書は、5社全て2016年2月発行に拠った。高等学校国語教科書は、筑摩書房『精選国語総合 現代文編改訂版』『国語総合 改訂版』に拠った。夏目漱石「俳句」は『漱石全集』(岩波書店)、芥川龍之介「俳句」は『芥川龍之介全集』(岩波書店)、寺田虎彦「俳句」は『寺田虎彦全集』(岩波書店)、又吉直樹「俳句」は『カキフライが無いなら来なかった』(幻冬舎文庫)に拠った。

## 註

1 俳句甲子園とは愛媛県松山市で毎年8月に実施される「全国高校俳句選手権大会」(略称「俳句甲子園」)である。他にも日本学生俳句協会主催の「全国学生俳句大会」(1988年)、愛称「全国学校対抗俳句の甲子園」があり、朝日新聞主催の「俳句甲子園」(1999年～2001年)があった。

2 宇多喜代子「俳句の可能性」『国語3』光村図書2016年2月、66頁～68頁。

3 宇多喜代子 同掲書、68頁。

- 4 編集委員会「俳句の世界」『現代の国語3』三省堂2016年2月、54頁。359頁。
- 5 片山由美子「俳句の読み方、味わい方」『新編新しい国語3』東京書籍2016年2月、23頁。
- 6 貞光威「高等学校教科書「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における近・現代俳句教材」『岐阜聖徳学園大学紀要』1996年9月、297～298頁。
- 7 貞光威氏の1996年の調査によると、高等学校国語教科書採録の女性俳人では、杉田久女は一六回、中村汀女は二四回であった。前掲書、284頁・285頁。
- 8 坂本宮尾「美と格調―杉田久女」『鑑賞 女性俳句の世界 第一巻』角川学芸出版2008年1月、310頁。
- 9 鈴木厚子『杉田久女の世界』駒草書房2010年1月、110頁。
- 10 水上勉「平常心の道」小川濤美子・星野椿・橋本美代子・三橋陽一・石昌子監修『4T+H女性俳句の先覚者』東京四季出版1997年11月、55頁。
- 11 「みちしるべ」『伝え合う言葉 中学国語3』教育出版2016年2月、158頁。
- 12 「表現ブラザ」『現代の国語』三省堂2016年2月、62～63頁。
- 13 湯本明子『俳人杉田久女の世界』本阿弥書店1999年9月、

**A study on Japanese language art education  
—A verbal expression of HAIKU—**

Keiko OGIHARA

Course of Principal Human Sciences, Department of Human

Development, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi

807-8586, Japan

No English abstract